

仏法と怪異 日本霊異記の世界

武田比呂男（著）（2023年3月，法藏館）

東京都立大学 人文科学研究科 教授 猪股ときわ

『日本霊異記』は9世紀前半、嵯峨天皇の弘仁年間成立とされる仏教説話集である。ところが、本書の「序曲—ouverture」は夏目漱石の『夢十夜』第三夜への言及から始まり、「あとがき」冒頭は「作家の村上春樹は、まえがきやあとがきをつけるのが好きではないと言う」と始まる。書評するにあたって「序曲」や「あとがき」から書き始めるのもどうか、とは思う。が、本書を開いてまず「序曲」と「あとがき」を読み、著者で旧友の武田氏らしいなと思い、読了の後、あらためて、この始まりと語り収めは本書にふさわしいと感じている。

著者が9世紀の書物を近代や現代の小説を読むようにして論じている、ということではない。文字を用いて書物を書くということにおいて、人がこの世に生まれ、死ぬという営為を、日常的な意識が見る現在のみならず、夢や、意識が知らない無意識領域までを含めて思考しようとするとき、ふっと千年以上の隔たりを越えて普遍的位相が現れるかもしれないことを、本書は読者に語り掛けようとしていると思われるのである。

むしろ、本書は千年の歴史や、『日本霊異記』が小説ではなく仏教説話であることを無化しようというわけではない。むしろ仏教ないし仏法の論理の衝撃が9世紀の書き手に何をもたらしたのかを見据えようとしている。

説話を集め、配列する行為が何を狙っているのか、そのことは景戒にとってどのような意味を持つのか、説話文学という枠をとりはらって、宗教実践者としての景戒に寄り添ってテキストに関わりたいのである。（「序曲」20～21頁）

上記のもくろみは、とくに第九章「僧の境位と現報の語り—『日本霊異記』の目指したもの」に結実している。一方、本書全体にわたって一貫して目指されていることについては、次のように述べられている。

もう一つは『日本霊異記』の説話が生まれた時代の人々の精神・心性のありようを読み取りたいということである……（中略）……仏教が伝来し、しだいに浸透していく中で、人々の精神・心性がどのように変化していったのか。そうした転換期の表現として読み解きたいと考える。（「序曲」21～24頁）

目前の出来事を、編者景戒が過去世・現世・来世の三世の因果律のもとに描き出そうとすることは、あくまでも編者の宗教実践—因果の理が「日本」にあまねくゆきわたっていることを明らかにすること

で、書き手自身と、読み手（ないし、説話の聞き手）を救済しようとする行為—として読むことができる。しかし、その結果として描かれた世界に、この時代なればこその人々の「精神・心性」がテキスト上に描き出されることになった、その実態を追及するというのである。

おそらく、こうした時代に即した読みの試みこそが、不意に、同じく「転換期」を生きた漱石の『夢十夜』や、日本語文と英文翻訳文のはざまに立つ村上春樹を引き寄せたのではないかと推察する。近現代の小説が描く「精神・心性」は著者にとっての現在であるから。

いや、編者景戒が「靈異」と称するところを、あえて「怪異」と言い換える本書は、「古代」ににじり寄ることで「古代」という軀からの飛翔を、やはり、もくろんでいるのではないかと。

怪異とはなにか。古代文学においてのそれは、象徴的な言い方をすれば、二元的世界の異界の現れとしての異形の出現ということができただろう・・・（中略）・・・顕わになる本性はその他界の姿＝異界性であり、それに触れるものを畏怖させる超越性である。内部と外部の臨界点にあらわれる神話的な「異形」こそが怪異といってよい。（「序曲」16～17頁）

近年、『日本靈異記』の研究は經典の注釈書を含む仏教書類との関わりの追及において、大きく転回しつつあり、その進展には目を見張るものがある。しかし、そこには、当時の人々の「心性」への踏み込みが不足しているのではないかと、という一抹の不満がつきまとう。一方、本書は、なぜ生まれ、なぜ死ぬのかと、みずからの死や生を問うとき、触れざるを得ない「内部と外部の臨界点」に、常に目を凝らしてゆくのである。精神史、心性史としてのみならず、文学史としてこそ、必至の姿勢ではなかったか。ここに本書の大きな魅力がある。

一点、仏教以前からの神觀念として「姿を持たない神」（128頁）とし、『古事記』の足柄坂の神が白鹿に、伊吹山の神が白猪に化して現れる記述について「一時的な変化の姿」であり、神は「現実の身を持つとは考えられていなかった」（「注」130頁）とするが、どうであろうか。神が動物（異類）の姿と化して人の前に現れた、とする記述にはらまれる神話的思考は、『日本靈異記』の、輪廻によって母や父が牛と化して現れるという叙述に、「心性」としては連なる要素があるのではないかと。この点、長年の友人である著者と、おおいに議論してみたいところである。